

## 周日校刊『三国志演義』について

中川 諭

—

周知のとおり、『三国志演義』には四十種あまりの版本が現存し、世界各地の各機関に蔵されている。その中でも、嘉靖本<sup>(1)</sup>と葉逢春本<sup>(2)</sup>はいずれも嘉靖年間の刊行であり、刊行年が比較的早いことから、最も重要な版本だと見なされている。明末期の書肆周日校が刊行した『新刊校正古本大字音釈三国志通俗演義』（いわゆる「周日校本」）もそれらに次いで重要な版本である。それは、残本を除けば嘉靖本・葉逢春本に次いで刊行年が古いこと、嘉靖本と同じ二十四巻系に属し、刊行年は嘉靖本より七十年遅れるけれども、嘉靖本で誤っている文字・文章が周日校本では正しくなっている個所があること、関羽の架空の息子関索が登場する最も古い版本であること、などがその理由である。

従来周日校本は一種のみと考えられてきた。すなわち万暦十九年（1591年）刊本で、国立公文書館・名古屋市蓬左文庫に蔵される本である。かつて孫楷第が『中国通俗小説書目』<sup>(3)</sup>の中でこの周日校本について「日本内閣文庫蓬左文庫蔵覆本」と指摘しているのであるが、この指摘はほとんど顧みられることはなかった。ところが最近劉世徳氏によって、この孫楷第の指摘をより具体的に詳細に論じた研究が発表された。それが劉氏の「《三国志演義》周日校刊本四种试论」<sup>(4)</sup>という論文である。劉氏はこの論文の中で次のことを指摘する。周日校本には甲本・乙本・丙本そして仁寿堂本<sup>(5)</sup>の四種類があり、仁寿堂本はすでに失われていること、甲本は乙本・丙本と版式が異なり、乙本は甲本の翻刻本であること、丙本は乙本と版式が同じであり、乙本の翻刻本であること、乙本と丙本の大きな違いは、乙本の巻一第一則（第一葉裏と第二葉表）と巻二第一則（第一葉裏と第二葉表）の図像の中に画工と刻工の署名が見られるが、丙本にはそれがいないことである。また乙本封面などの記載によって、その刊行年は万暦十九年であり、そして甲本の刊行年は、乙本より数年早いであろうから、おおよそ万暦十年から十五年頃であろうと推察する。

数年前、韓国で周曰校本の朝鮮翻刻本と朝鮮活字本が相継いで発見された。朴在淵氏は、朝鮮翻刻本は周曰校甲本の翻刻本であると述べている<sup>6)</sup>。朝鮮翻刻本の巻十二末葉には二種類あり、一つは鮮文大学校朝鮮翻訳研究所蔵本のもの、もう一つは李謙魯氏私蔵のもので、李謙魯氏蔵本の末葉には「歳在丁卯耽羅開刻」とある。劉世徳氏はこの「丁卯」を隆慶元年（1567年）と考え、これによって周曰校甲本の刊行年は遅くとも嘉靖末であると、先の周曰校甲本の刊行年についての考えを改めた。さらに、朝鮮翻刻本の冒頭にある修髯子「三国志通俗演義引」に「嘉靖壬子」と記されていることから、周曰校甲本の刊行年は嘉靖壬子、すなわち嘉靖三十一年（1552年）と判断した<sup>7)</sup>。

筆者は最近数種類の周曰校刊本『三国志演義』を閲覧する機会を得た。それら数種類の周曰校本の調査を経て、周曰校本に関するいくつかの新しい見解を得ることができた。本稿では周曰校刊『三国志演義』をめぐるいくつかの問題のうち、現存する丙本数種の印刷の先後を明らかにし、そこから甲本の刊行年を考察しようとするものである。

## 二

本節では筆者が直接調査することのできた各種周曰校本について紹介する。

### ○甲本

- ・中国社会科学院文学研究所図書館蔵本（巻六・七・九のみ存する。）
- ・朝鮮翻刻本<sup>8)</sup>

### ○乙本

- ・北京大学図書館蔵本（巻一、二、五、九から十二のみ存する。）
- ・イエール大学図書館蔵本（巻一第一葉・第二葉の書影のみ目睹した。）

### ○丙本

- ・国立公文書館蔵本<sup>9)</sup>
- ・名古屋市蓬左文庫蔵本
- ・宮城県図書館伊達文庫蔵本（巻九から十二のみ存する。）
- ・中国国家図書館蔵本（巻三、四、五、六、九、十のみ存する。）
- ・台湾故宮博物院蔵本<sup>10)</sup>
- ・京都産業大学図書館小川文庫蔵本（巻一、二、四のみ存する。）

六種類の周日校刊本のうち、現存する数が最も多いことから、一番よく知られているのは周日校丙本である。従来一般的に「周日校本」と呼ばれていたのは、丙本である。

現在のところ存在が確認されている丙本は、全部で六種類ある。これらはお互いどのような関係にあるのだろうか。

六種類の丙本はいずれも同版であるから、当然ながら、基本的には文章や文字の違いはない。しかし印刷された時間の前後は自ずから存在する。それでは六種類の丙本のうちどの本の印刷が早く、どの本が遅いのであろうか。

六種類の丙本を比較すると、その印刷の状態から、印刷された順序を知ることができる。そしてそれは、蓬左文庫本がもっとも早く、伊達文庫本がこれに次ぎ、続いて小川文庫本、内閣文庫本、国家図書館本、台湾故宮本の順で印刷されたと考えられる。以下このことについて論じてみたい。六種類の丙本のうち三本は残本であり、残存している巻が必ずしも共通しているわけではない。そこでまず小川文庫本を除く五種類の丙本でその先後関係を考え、続いて小川文庫本を取り上げる。

次の図を見てみよう。最初の例(図1~5)は、巻九の第二十四葉表である。

蓬左文庫本の印刷状態はとてもよく、それぞれの文字がはっきりしており、磨滅したところはどこにもない(図1)。伊達文庫本の同じ葉を見ると(図2)、蓬左文庫本に比べていくらかの文字が磨滅している。たとえば、二十四葉表第八行以降の真ん中あたりは、文字がはっきりしない。八行目の「召陸」・九行目の「顧雍」十行目の「於大王」などの文字はみな磨滅して読めなくなっている。さらに内閣文庫本(図3)・国家図書館本(図4)・台湾故宮本(図5)を見ると、文字の磨滅は伊達文庫本よりもさらにひどくなっている(ただし国家図書館本の磨滅した部分は、筆書きで補ってある)。さらに細かく見てみると、内閣文庫本は国家図書館本・台湾故宮本に比べて文字の磨滅の程度がいくらか小さい。二十四葉表終わりから二行目と一行目にある二つの「以」字と終わりから一行目「不能」の「不」字は、内閣文庫本では比較的是っきり見えるが、国家図書館本と台湾故宮本ではこれらの文字はみな磨滅している。また終わりから一行目の「盡展」の二字は、国家図書館本は台湾故宮本に比べていくらかはっきりしている。これら文字の磨滅状態から、蓬左文庫本の印刷時期がもっとも早く、伊達文庫本がそれに次ぎ、以下内閣文庫本・国家図書館本・台湾故宮本の順で印刷されたのであろうと考えられる。

擊天之柱如何不用耶表視之乃關澤也權曰德潤也足知其才  
乃是何人也當日關澤舉薦之人未知是誰且聽下回分解  
陸瑋定計破蜀兵  
知說關澤奏曰昔日東吳大事全在周郎以後當于敵代之子教亡  
矣快哉呂子明今子明雖喪其有陸伯言在荊州此人名雖儒生  
足有雄才大略以臣論之不在周郎之下前破關公皆伯言之謀也  
王上若能用之破蜀必矣如若有失臣請乞納其頭權曰非德潤之  
言孤豈誤大事也即令去召陸遜年幼才疎德薄恐諸公不  
備之敵手也切不可用之也權曰陸遜年幼才疎德薄恐諸公不  
備若不取則生禍亂必懼權曰陸遜年幼才疎德薄恐諸公不  
備令而已若托以大事非其宜也關澤大呼曰若不用陸伯言則東  
吳休矣臣願將全家以保之權曰孤亦知陸伯言乃奇才也孤當托  
之權曰大王若不肯以重任其才不能盡展也權曰然則是召陸遜

擊天之柱如何不用耶表視之乃關澤也權曰德潤也足知其才  
乃是何人也當日關澤舉薦之人未知是誰且聽下回分解  
陸瑋定計破蜀兵  
知說關澤奏曰昔日東吳大事全在周郎以後當于敵代之子教亡  
矣快哉呂子明今子明雖喪其有陸伯言在荊州此人名雖儒生  
足有雄才大略以臣論之不在周郎之下前破關公皆伯言之謀也  
王上若能用之破蜀必矣如若有失臣請乞納其頭權曰非德潤之  
言孤豈誤大事也即令去召陸遜年幼才疎德薄恐諸公不  
備之敵手也切不可用之也權曰陸遜年幼才疎德薄恐諸公不  
備若不取則生禍亂必懼權曰陸遜年幼才疎德薄恐諸公不  
備令而已若托以大事非其宜也關澤大呼曰若不用陸伯言則東  
吳休矣臣願將全家以保之權曰孤亦知陸伯言乃奇才也孤當托  
之權曰大王若不肯以重任其才不能盡展也權曰然則是召陸遜

擊天之柱如何不用耶表視之乃關澤也權曰德潤也足知其才  
乃是何人也當日關澤舉薦之人未知是誰且聽下回分解  
陸瑋定計破蜀兵  
知說關澤奏曰昔日東吳大事全在周郎以後當于敵代之子教亡  
矣快哉呂子明今子明雖喪其有陸伯言在荊州此人名雖儒生  
足有雄才大略以臣論之不在周郎之下前破關公皆伯言之謀也  
王上若能用之破蜀必矣如若有失臣請乞納其頭權曰非德潤之  
言孤豈誤大事也即令去召陸遜年幼才疎德薄恐諸公不  
備之敵手也切不可用之也權曰陸遜年幼才疎德薄恐諸公不  
備若不取則生禍亂必懼權曰陸遜年幼才疎德薄恐諸公不  
備令而已若托以大事非其宜也關澤大呼曰若不用陸伯言則東  
吳休矣臣願將全家以保之權曰孤亦知陸伯言乃奇才也孤當托  
之權曰大王若不肯以重任其才不能盡展也權曰然則是召陸遜

(圖3 内閣文庫本 9-24a)

(圖2 伊達文庫本 9-24a)

(圖1 蓬左文庫本 9-24a)

擊天之柱如何不用耶表視之乃關澤也權曰德潤也足知其才  
乃是何人也當日關澤舉薦之人未知是誰且聽下回分解  
陸瑋定計破蜀兵  
知說關澤奏曰昔日東吳大事全在周郎以後當于敵代之子教亡  
矣快哉呂子明今子明雖喪其有陸伯言在荊州此人名雖儒生  
足有雄才大略以臣論之不在周郎之下前破關公皆伯言之謀也  
王上若能用之破蜀必矣如若有失臣請乞納其頭權曰非德潤之  
言孤豈誤大事也即令去召陸遜年幼才疎德薄恐諸公不  
備之敵手也切不可用之也權曰陸遜年幼才疎德薄恐諸公不  
備若不取則生禍亂必懼權曰陸遜年幼才疎德薄恐諸公不  
備令而已若托以大事非其宜也關澤大呼曰若不用陸伯言則東  
吳休矣臣願將全家以保之權曰孤亦知陸伯言乃奇才也孤當托  
之權曰大王若不肯以重任其才不能盡展也權曰然則是召陸遜

擊天之柱如何不用耶表視之乃關澤也權曰德潤也足知其才  
乃是何人也當日關澤舉薦之人未知是誰且聽下回分解  
陸瑋定計破蜀兵  
知說關澤奏曰昔日東吳大事全在周郎以後當于敵代之子教亡  
矣快哉呂子明今子明雖喪其有陸伯言在荊州此人名雖儒生  
足有雄才大略以臣論之不在周郎之下前破關公皆伯言之謀也  
王上若能用之破蜀必矣如若有失臣請乞納其頭權曰非德潤之  
言孤豈誤大事也即令去召陸遜年幼才疎德薄恐諸公不  
備之敵手也切不可用之也權曰陸遜年幼才疎德薄恐諸公不  
備若不取則生禍亂必懼權曰陸遜年幼才疎德薄恐諸公不  
備令而已若托以大事非其宜也關澤大呼曰若不用陸伯言則東  
吳休矣臣願將全家以保之權曰孤亦知陸伯言乃奇才也孤當托  
之權曰大王若不肯以重任其才不能盡展也權曰然則是召陸遜

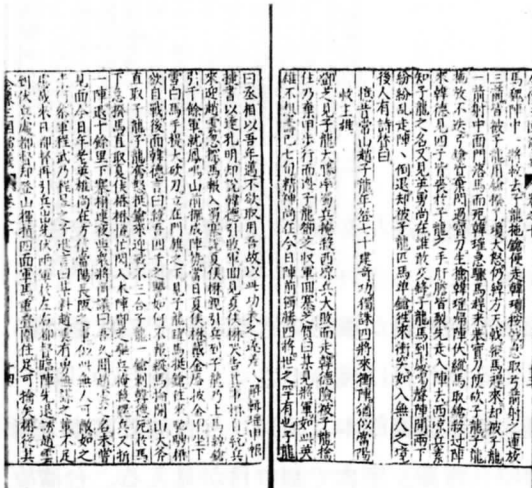
擊天之柱如何不用耶表視之乃關澤也權曰德潤也足知其才  
乃是何人也當日關澤舉薦之人未知是誰且聽下回分解  
陸瑋定計破蜀兵  
知說關澤奏曰昔日東吳大事全在周郎以後當于敵代之子教亡  
矣快哉呂子明今子明雖喪其有陸伯言在荊州此人名雖儒生  
足有雄才大略以臣論之不在周郎之下前破關公皆伯言之謀也  
王上若能用之破蜀必矣如若有失臣請乞納其頭權曰非德潤之  
言孤豈誤大事也即令去召陸遜年幼才疎德薄恐諸公不  
備之敵手也切不可用之也權曰陸遜年幼才疎德薄恐諸公不  
備若不取則生禍亂必懼權曰陸遜年幼才疎德薄恐諸公不  
備令而已若托以大事非其宜也關澤大呼曰若不用陸伯言則東  
吳休矣臣願將全家以保之權曰孤亦知陸伯言乃奇才也孤當托  
之權曰大王若不肯以重任其才不能盡展也權曰然則是召陸遜

(圖5 台湾故宮本 9-24a)

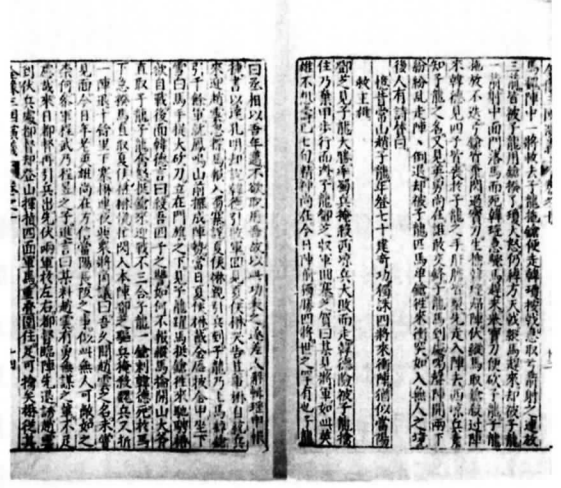
(圖4 国家図書館本 9-24a)

別の例を見てみよう。次の例(図6~10)は、巻十第十三葉裏・十四葉表である。まず内閣文庫本(図8)・国家図書館本(図9)・台湾故宮本(図10)を見ると、それぞれの中

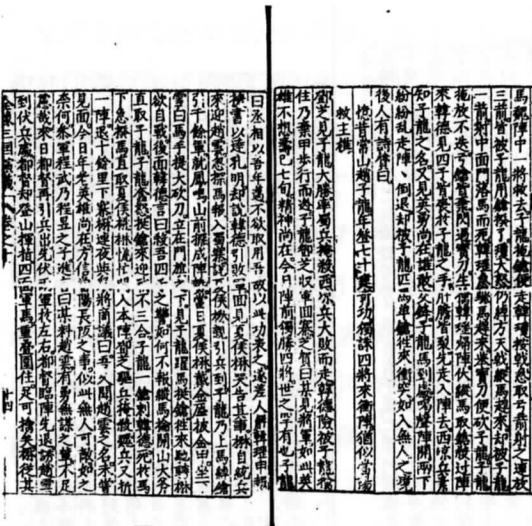
央あたりに大きな版木の割れ目が見える。その大きさはそれほど大差なく、ここからの三本の先後を判断するのは難しい。一方蓬左文庫本にはまったく割れ目はない。また伊達文庫本には十三葉裏の終わりから三行目の「西」・「収」・「日」字と十四葉表の一行目「故」字のところになぜかな割れ目が見えるが、内閣文庫本など三本に比べるとはるかに小さい。この例から、蓬左文庫本の印刷がもっとも早く、伊達文庫本がそれに次ぎ、内閣文庫本など三本は蓬左文庫本や伊達文庫本に比べて印刷が遅いことが分かる。



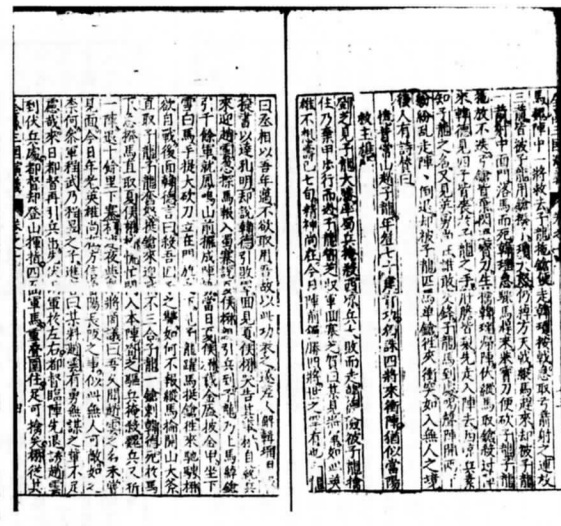
(図6 蓬左文庫本 10-13b, 14a)



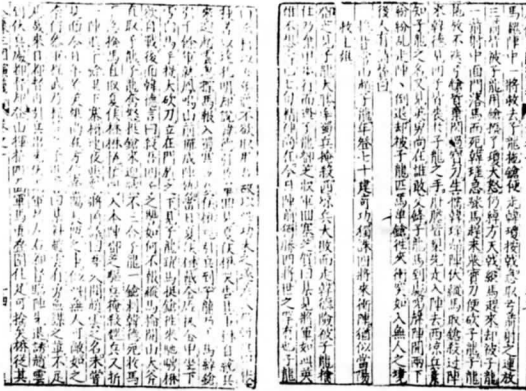
(図7 伊達文庫本 10-13b, 14a)



(図8 内閣文庫本 10-13b, 14a)



(図9 国家図書館本 10-13b, 14a)

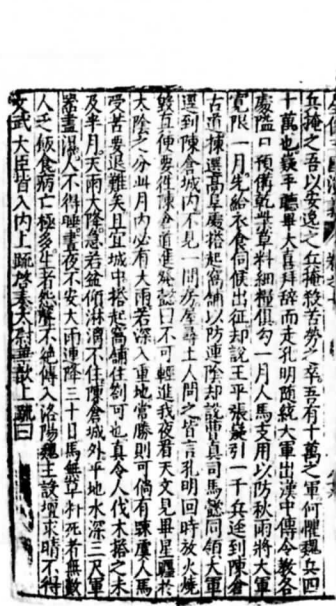


(図10 台湾故宮本 10-13b, 14a)

三つ目の例(図11~15)は巻十第八十六葉裏である。蓬左文庫本(図11)と伊達文庫本(図12)にはまったく割れ目が確認できず、版面はとてもきれいで、印刷状態も良い。内閣文庫本など三本を見ると、いずれも一本の大きな割れ目が確認できるが、その状態は必ずしも同じではない。内閣文庫本(図13)に見える割れ目は幾分小さく、一行目の「殺」字から七行目の「懿」字まで版木が割れている。国家図書館本(図14)と台湾故宮本(図15)はいずれも一行目の「殺」字から最後の行の「啓奏」字まで割れ目が見える。台湾故宮本の同じ個所にも割れ目があるが、国家図書館本のものよりもさらに大きく、そして割



(図11 蓬左文庫本 10-86b)



(図12 伊達文庫本 10-86b)



(図13 内閣文庫本 10-86b)

五掩之吾以安遠之兵孫綽苦於受兵有上蓋之軍何謂孫綽  
 十萬也戰事所畢大喜拜而走出孔明題統大軍出漢中便令教各  
 糜廩口預備乾草料細糧俱旬一月人馬支用必防秋時將大軍  
 寬限一月先給衣食伺候出征却說王平張翼引一千兵到陳倉  
 右道揀選高阜處搭起窩舖以防不虞  
 運到陳倉城內不覺 間在 同時放火燒  
 發真便要往陳倉道進發路日不可  
 大陰之分此月內必有大雨若深入  
 受暑要退難矣且宜城中拏是會舖住紮可也令人伐木搭之木  
 及幸几天雨大陰急若盆傾淋漓不住陳倉城外平地水深二尺軍  
 器盡濕人不得喘晝夜不安大雨連降三日馬無草料死者無數  
 人乏飯食病亡極多生者皆解不傳入洛陽魏主設壇求晴不得  
 文武大臣皆入內上疏啓奏太尉華歆上疏曰

五掩之吾以安遠之兵孫綽苦於受兵有上蓋之軍何謂孫綽  
 十萬也戰事所畢大喜拜而走出孔明題統大軍出漢中便令教各  
 糜廩口預備乾草料細糧俱旬一月人馬支用必防秋時將大軍  
 寬限一月先給衣食伺候出征却說王平張翼引一千兵到陳倉  
 右道揀選高阜處搭起窩舖以防不虞  
 運到陳倉城內不覺 間在 同時放火燒  
 發真便要往陳倉道進發路日不可  
 大陰之分此月內必有大雨若深入  
 受暑要退難矣且宜城中拏是會舖住紮可也令人伐木搭之木  
 及幸几天雨大陰急若盆傾淋漓不住陳倉城外平地水深二尺軍  
 器盡濕人不得喘晝夜不安大雨連降三日馬無草料死者無數  
 人乏飯食病亡極多生者皆解不傳入洛陽魏主設壇求晴不得  
 文武大臣皆入內上疏啓奏太尉華歆上疏曰

(図14 国家図書館本 10-86b) (図15 台湾故宮本 10-86b)

れ目の上下で文字がズレていて、国家図書館本よりも印刷状態がさらに悪い。この例によって、この三本の中では、内閣文庫本の印刷状態がいくらかよく、国家図書館本がそれに次ぎ、台湾故宮本がもっとも劣っていることが分かる。

次に小川文庫蔵本を取り上げる。

まず小川文庫本を他の丙本と比べてみると、字の潰れ方・版木の割れ目などの様子からその印刷状態は内閣文庫本と類似しており、印刷時期も比較的近いと思われる。しかし中にはいくつか違いも見られる。

次の図(図16~18)を見てみよう。巻一第二十四葉の表・裏である。まず蓬左文庫本(図16)をみると、まったくきれいな版面をしていて版木の磨滅による字の潰れはまったく見られない。内閣文庫本(図17)では七行目「何」字の下あたりから版木の磨滅による字の潰れが目立ち始め、その後表葉十三行目までと版心を挟んで裏葉三行目まで、字が潰れてほとんど読めない。一方小川文庫本(図18)は、蓬左文庫本ほどではないものの、比較的文字ははっきりしており、読めなくなってしまう文字はない。このことから、小川文庫本の印刷は内閣文庫本よりは早いであろうと考えられる。





此對越海各戰事... 伊達文庫本... 卷九... 卷十二... 小川文庫本... 卷一... 卷二... 卷四... 伊達文庫本... 卷九... 卷十二... 小川文庫本... 卷一... 卷二... 卷四...

(図20 内閣文庫本 2-77a, b)

此對越海各戰事... 伊達文庫本... 卷九... 卷十二... 小川文庫本... 卷一... 卷二... 卷四... 伊達文庫本... 卷九... 卷十二... 小川文庫本... 卷一... 卷二... 卷四...

(図19 蓬左文庫本 2-77a, b)

此對越海各戰事... 伊達文庫本... 卷九... 卷十二... 小川文庫本... 卷一... 卷二... 卷四... 伊達文庫本... 卷九... 卷十二... 小川文庫本... 卷一... 卷二... 卷四...

(図21 小川文庫本 2-77a, b)

此對越海各戰事... 伊達文庫本... 卷九... 卷十二... 小川文庫本... 卷一... 卷二... 卷四... 伊達文庫本... 卷九... 卷十二... 小川文庫本... 卷一... 卷二... 卷四...

では小川文庫本と伊達文庫本では、どちらの印刷がより早いのでしょうか。伊達文庫本・小川文庫本とも残本である。そして伊達文庫本の残存部分は巻九から巻十二、小川文庫本の残存部分は巻一・二・四で、共通して残存している部分がない。そのため直接に両本を比較してその先後関係を考えることができない。

上述のように、小川文庫本と内閣文庫本を比較すると、わずかながら小川文庫本の方が内閣文庫本よりも印刷状態がよいものの、その差は比較的小さく、印刷された時間もおよそ近いと考えられる。一方伊達文庫本と内閣文庫本は、その印刷状態は伊達文庫本の方が遥かによく、よって印刷された時間も伊達文庫本の方がかなり早いであろう。だとすると、小川文庫本は伊達文庫本よりも遅い印刷であると考えて差し支えないだろう。

以上の例から、六種類の周曰校丙本は、以下のような順序で印刷されたと考えられる。

- 1, 蓬左文庫蔵本（日本名古屋・尾張徳川家）
- 2, 伊達文庫蔵本（日本仙台・伊達家）
- 3, 小川文庫蔵本（小川環樹氏旧蔵）
- 4, 内閣文庫蔵本（日本江戸・徳川将軍家、旧紅葉山文庫）
- 5, 中国国家図書館蔵本
- 6, 台湾故宮博物院蔵本

印刷状態の比較的良好な早い時期の印本はいずれもみな日本国内に蔵されている。このことは何を意味するのであろうか。すなわちこれは、書肆周曰校が新刊本を出版すると、それはすぐに中国国外に輸出されていたということではないだろうか。今のところそれが明代の出版状況の中で特殊なことなのか普遍的なことなのか、すぐさま判断はできない。しかし少なくとも周曰校丙本『三国志演義』の早い時期の印本は、中国国外に向けて輸出されていた。だとすると、周曰校が刊行したそれ以外の書籍も、周曰校丙本と同様に、新刊本が出版されるとすぐに中国国外に向けて輸出された可能性は十分考えられるだろう。

#### 四

周曰校甲本の刊行年について、劉世徳氏にすでに言及がある。劉氏はまず、乙本封面の識語に「節目有全像」とあることから、挿図のない甲本の方が各則ごとに挿図のある乙本より刊行が早いとする。そして乙本の刊行年が万暦十九年であることによって、甲本の刊行は乙本より数年早いであろうから、万暦十年から十五年であろうと推定した<sup>(11)</sup>。劉氏がこの説を発表した後、韓国で周曰校本の翻刻本が発見された。この朝鮮翻刻本は周曰校甲本の翻刻である<sup>(12)</sup>。そして劉氏は朝鮮翻刻本によって周曰校甲本の刊行年についての考えを修正する。朝鮮翻刻本には二種類の巻十二末葉がある。鮮文大学校朝鮮翻訳研究所蔵本の末葉と李謙魯氏私蔵本の末葉である。その印刷状態から、この二種類は同版ではないことが分かる。そして刊行は李氏蔵本の方がいささか遅い。李氏蔵本の末葉には「歳在丁卯耽羅開刻」という記載がある。劉世徳氏はこの「丁卯」を隆慶元年（1567年）と判断し、よって朝鮮翻訳研究所蔵本の刊行は嘉靖年間末だとする。これによって周曰校甲本の刊行年も嘉靖年間末以前だとする。そしてさらに、朝鮮翻刻本冒頭には修髯子「三国志通俗演義引」があるが、いわゆる嘉靖本が「嘉靖壬午」に作っている修髯子引の年代を、朝鮮翻

刻本では「嘉靖壬子」に作っている。その他周曰校丙本や夏振宇本<sup>113)</sup>はいずれもみな「嘉靖壬子」に作っていることから、劉世徳氏はこの「嘉靖壬子」は「嘉靖壬午」の誤りなのではなく、周曰校甲本が刊行される時期に「壬午」から「壬子」に改められたのだとする。そして周曰校甲本の刊行年は嘉靖壬子、すなわち嘉靖三十一年(1552年)だと結論づける<sup>114)</sup>。

筆者は劉氏のこの考えにいささか疑問を感じる。周曰校甲本の刊行年が嘉靖三十一年だというのは、やはりずいぶんと早すぎはしないだろうか。以下、筆者の考えを述べ、劉氏への反論を試みたい。

筆者は、朝鮮翻刻本李氏蔵本の「丁卯」は天啓七年(1627年)であり、周曰校乙本の刊行年が万曆十九年である以上、周曰校甲本の刊行年は万曆十年から十五年頃ではないかと考える。筆者は劉氏の以前の考えに同意したい。

周曰校甲本が刊行されてから朝鮮半島に伝わるまで、数十年もの長い時間は必要ない。周曰校甲本の刊行と朝鮮翻刻本の刊行のタイムラグはそれほど大きくはなかろう。周曰校甲本の刊行は確かに万曆年間であり、嘉靖年間にまで遡る必然性はないように思われる。万曆十五年前後に周曰校甲本が出版され、それから間もなく朝鮮半島に伝わり、朝鮮半島では好評を得て、最初の朝鮮翻刻本が出版された。このような過程には、四、五年の時間があれば十分であろう。

それは次の五つの理由による。

## 1, 新刊本が出版されてから中国国外に伝わる時間

先に述べたように、筆者が調査をすることのできた六種類の周曰校丙本のうち比較的印刷状態のよい早期印本は、いずれも現在日本の所蔵機関に蔵されている。すなわち、周曰校丙本が出版されるとすぐに中国国外に伝わっているのである。ならば、周曰校甲本も出版された後すぐに中国国外に輸出された可能性は十分考えられるであろう。

## 2, 輸出された貨物が相手国に届く時間

ある一つの本が中国で出版された後、どれくらいの時間をかけて朝鮮半島に伝わったのであろうか。日本の江戸時代の貿易に関する資料の一つに「大意書」と呼ばれるものがある。「大意書」は輸入した書籍の記録で、中国から輸入された書籍が長崎に到着した時に作成された。「大意書」によって、いつどのような書籍が中国から日本に輸入されたのかを知ることができる。元禄七年(1694年、康熙三十三年)の「大意書」には、『書経蔡伝大全提訓』という書物が著録されている<sup>115)</sup>。この本は、康熙二十八年(1689年)に作られたものである。すなわち、この本は出版されて後わずか五年で日本の長崎に伝わったことになる。これは中国の清代の状況についてであるが、当時の技術的な力量からして、恐ら

く明代もおおよそ同じような状況であったであろう。だとすると、わずか数年の時間があれば、中国で出版された書物は日本に伝えられていたのである。朝鮮半島についても、おおよそ同じであろう。

では中国を出発した貿易貨物はどれくらいの時間をかけて朝鮮半島に届けられたのだろうか。

やはり日本の状況についてであるが、松浦章氏に日中貿易についての詳細な研究がある。松浦氏はその著書『江戸時代唐船による日中文化交流』<sup>(16)</sup>の中で、道光『乍浦備志』<sup>(17)</sup>巻十四「前明倭変」の以下の記載を引用する。

西風順利、四五日即可到彼、否則十余日、到三、四十日不等。

この『乍浦備志』の記述によれば、中国・浙江の乍浦を出発した貿易船は、出発後最短では四五日、あるいは十数日から一ヶ月前後の時間をかけて日本の長崎に到着していたことが分かる。さらに松浦氏は、次のように述べる。

貞享二年二月七日（一六八五年三月一日）に長崎へ入港した一番福州船は、正月七日（一六八五年二月一〇日）に福州を出航し、そして舟山列島の普陀山へ寄港して、同地を二月一日（三月五日）に出港し同七日（一一日）に長崎に到着した。<sup>(18)</sup>

すなわち、福州を出発した貿易船は、およそ一ヶ月の時間を経て、長崎に到着している。

このように、中国から日本まで、貿易貨物の運搬にはそれほど時間は必要としない。中国と日本の間の貿易は水路による。一方中国と朝鮮の貿易は陸路による。したがって状況は必ずしもまったく同じというわけではないかも知れない。しかし貨物を運搬することにおいては、年単位に渉るような大きな差はないのではないかと。したがって貿易貨物の運搬の状況から、中国で出版された書籍は、出版後それほど時間をおかずに朝鮮半島に伝えられたのである。

### 3. 書肆周曰校が活躍した時期

杜信孚・杜同書編『全明分省分県刻書考』<sup>(19)</sup>の「周曰校 万巻楼」の項目には、書肆周曰校が刊行した三十七種の書物が著録されている。そしてそれらの大部分は万暦年間の刊行である。もっとも早いものは『東垣十書十二種』二十二巻と『卓氏藻林』八巻で、いずれも万暦十一年の刊行である。もっとも遅いものは、崇禎元年に刊行された『本草蒙筌』

十二卷である。その他、『改訂内閣文庫漢籍分類目録』<sup>(20)</sup>には、

本草蒙筌 一二卷総論一卷 明陳嘉謨編 明万曆元刊（周氏仁寿堂）

図像本草蒙筌 一二卷首一卷 明陳嘉謨編 劉孔敦補 明崇禎元序刊

を著録する。二種類の『本草蒙筌』が著録されているが、一つは万曆元年刊本、一本は崇禎元年刊本である。筆者は国立公文書館に蔵される二種の『本草蒙筌』を調査した。そのうち崇禎元序刊の『図像本草蒙筌』の封面には「万卷楼周如泉刊行」と題しており、「周曰校」の名前は見いだせない。したがって『明代分省分県刻書考』に著録される『本草蒙筌』と内閣文庫に蔵される『図像本草蒙筌』が同一の版本なのかは分からない。しかしいづれにせよ、たとえ『明代分省分県刻書考』の記述が間違いであっても、周曰校刊行の書籍はみな万曆年間以降であり、嘉靖年間に刊行されたものは一つもない。『明代分省分県刻書考』に著録されているもの以外でも、書肆周曰校が万曆年間より早い時期に刊行した書籍は、筆者の知る限り存在しない。このように現存する周曰校刊行の書籍の刊行年からして、書肆周曰校は間違いなく万曆年間に活躍していた書肆であり、嘉靖年間にはまだ活動しておらず、書籍の出版も行っていなかったはずである。

#### 4. 四十年の空白

周曰校乙本が刊行されたのは万曆十九年であり、これには確かな証拠がある。すなわち、乙本の封面には周曰校自身の識語があり、そこに「万曆辛卯秋月周曰校謹識」（万曆辛卯は十九年、1591年）という記述がある。また乙本にある修髯子引の末尾には「万曆辛卯季冬吉望刊于萬卷樓」という一文が付け加えられている。これらから乙本の刊行が万曆十九年であることは間違いあるまい。劉世徳氏が述べられるように、もし周曰校甲本の刊行年が嘉靖三十一年であったならば、甲本の刊行から乙本の刊行まで四十年の開きがあることになる。甲本の刊行以降、周曰校はなぜ出版活動を行っていないのであろうか。周曰校が嘉靖・隆慶年間に出版した書物はなぜ一つも現存していないのであろうか。あるいは、嘉靖三十年頃から万曆十数年までの約四十年間、周曰校はなぜまったく活動していないのであろうか。筆者はこの四十年の空白を不自然に感じざるを得ない。

#### 5. 修髯子引の「壬午」と「壬子」

嘉靖本の首巻には二つの序文がある。一つは庸愚子の「三国志通俗演義序」、もう一つは修髯子の「三国志通俗演義引」である。庸愚子序の末尾には「弘治甲寅仲春幾望庸愚子

拜書」と題される。また修髯子引の末尾には「嘉靖壬午孟夏吉望関中修髯子書於居易草亭」と題している。「弘治甲寅」は弘治七年（1494年）で、「嘉靖壬午」は嘉靖元年（1522年）である。周曰校乙本・丙本・夏振宇本などにはみな庸愚子序と修髯子引があるが、その掲載の順序が嘉靖本と異なり、修髯子引が先にあり、庸愚子序が後にくる。そして、周曰校乙本などの修髯子引はみな末尾の年代を「嘉靖壬子」に作っている。劉世徳氏は、周曰校乙本など複数の版本が「壬子」に作っていることから、「嘉靖壬午」と「嘉靖壬子」はともに字の誤りではなく、書肆周曰校が周曰校甲本を出版する際に「壬午」を「壬子」に書き改めたのであり、「嘉靖壬子」すなわち嘉靖三十一年こそが周曰校甲本の刊行年であると述べる。

筆者は、「嘉靖壬子」はやはり「嘉靖壬午」の誤りではないかと思う。（あるいは「嘉靖壬午」が「嘉靖壬子」の誤りであるかも知れない。これについては嘉靖本の刊行年代とともに、今後さらに検討していく必要があるだろう。）

修髯子引は確かに嘉靖壬午年（元年）に書かれたものである。この事実は後世のいかなる人も変えることはできない。たとえ修髯子引の「嘉靖壬午」という年代を故意に「壬子」に書き改めたとしても、この句の下に「修髯子」の名前があるのだから、この句の意味からすると、周曰校が嘉靖壬子年にこの本を出版したということを示すことはできない。しかもこのような改変は文章の改竄に相当しよう。書肆周曰校はなぜわざわざ一つの序文の年代のみを書き改める必要があるのだろうか。またなぜ修髯子引の年代を書き改めて、庸愚子序の年代を書き改めなかったのだろうか。もし甲本においてもその刊行年を記そうとするのであれば、乙本の修髯子引末尾のように、改めて刊行年・刊行者・刊行した場所などを書き足したのではないか。後世の書肆が序文の年代のみを故意に書き改める可能性はきわめて低いのではないだろうか。よって、筆者は「嘉靖壬子」は周曰校乙本あるいはそれ以前の版本における文字の誤りであり、決して周曰校甲本の刊行年ではないと考えるのである。

以上のような理由と根拠により、周曰校甲本の刊行年は万暦十年から十五年頃であり、決して嘉靖年間の刊行ではあるまい。しかし周曰校甲本は確かに『三国志演義』の諸版本の中で刊行年の比較的早いものに違いはなく、この本の価値は決して下がることはないであろう。

## 五

以上、周曰校刊『三国志演義』をめぐるいくつかの問題について論じた。現存する数種

類の周曰校丙本『三国志演義』のうち、蓬左文庫本の印刷状態が最もよく、版面もきわめてきれいであり、初印本に比較的近い。周曰校甲本と乙本・丙本の版式は異なる。そして劉世徳氏が述べられるように、甲本の刊行は乙本・丙本より早いことは間違いあるまい。しかしその刊行は嘉靖年間まで遡ることはなく、やはり万暦刊本と見るべきであろう。

本稿では甲本と乙本・丙本の関係、あるいは乙本と丙本の関係まで述べることはできなかった。これらの問題については、稿を改めて論じることとしたい。

- 
- (1) 『三国志通俗演義』二十四卷。上海図書館、お茶の水図書館成篋堂文庫、イエール大学図書館など蔵。
  - (2) 『新刊通俗演義三国志史伝』十卷。スペイン・エスコリアル修道院蔵。
  - (3) 孫楷第『中国通俗小説書目』（人民文学出版社、1982年）。また『日本東京所見小説書目』（人民文学出版社、1958年）においても、「長澤氏言内閣文庫及名古屋蓬左文庫、並有此本覆本、余未及閱。」と述べている。
  - (4) 劉世徳「《三国志演義》周曰校刊本四种試論」（『文学遺産』2002年第五期）。後に劉世徳著『《三国志演義》作者与版本考論』（2010年、中華書局）に収録される。
  - (5) 上原究一氏は、「仁寿堂」は周曰校の書肆名の一つであることを証明し、周曰校本とは別に仁寿堂本というものは特に存在しないと述べる。上原究一「唐氏世徳堂と周曰校万卷楼仁寿堂の章回小説刊本の覆刻及び後印の事例について」（『中国古典小説研究』第16号、2011年11月予定、中国古典小説研究会）参照。
  - (6) 朴在淵「近世中国古典小説在朝鮮之出版」（『東アジア出版文化研究 ほしづくよ』、日本学術振興会アジア・アフリカ学術基盤形成事業、2010年）。
  - (7) 劉世徳「《三国志演義》朝鮮翻刻本考論」（『文学遺産』2010年第一期）。後に劉世徳著『《三国志演義》作者与版本考論』に収録される。
  - (8) 本稿では、鮮文大学校中韓翻訳文献研究所影印本（朴在淵・金敏智・曹永基校注、2008年）による。朝鮮翻刻本は、厳密に言えば周曰校刊本ではない。しかし各巻冒頭に「明書林周曰校刊行」と題して、注(6)前掲朴在淵氏の論文に指摘されているとおり、周曰校刊行の版本の翻刻であることは間違いない。よって便宜上ここに分類しておく。
  - (9) 現在、独立行政法人国立公文書館には正式名称としての「内閣文庫」という部門はなくなった。しかし本稿ではこれまでの通例に従い、以下「内閣文庫本」と称する。

- (10) 本稿では、陳翔華主編「三国志演義古版叢刊続輯」所収の影印本（2005年、全国図書館文献縮微復制中心）による。
- (11) 劉世徳「《三国志演義》周曰校刊本四种試論」。
- (12) 朴在淵「近世中国古典小説在朝鮮之出版」。
- (13) 『新刊校正古本大字音釈三国志伝通俗演義』十二卷。名古屋市蓬左文庫蔵。
- (14) 劉世徳「《三国志演義》朝鮮翻刻本考論」。
- (15) 大庭脩著『江戸時代における唐船持渡書の研究』（関西大学出版部、1967年）。この書の「資料編」に、元禄七年の大意書を収録する。本稿は大庭氏の著書による。
- (16) 松浦章著『江戸時代唐船による日中文化交流』（思文閣出版、2007年）。
- (17) 『乍浦備志』三十六卷、清・鄒環編。本稿では、『中国地方誌集成・郷鎮志專輯』所収の道光二十三年（1843年）補刻本の影印を用いる。
- (18) 注(16)前掲松浦氏著書。
- (19) 杜信孚・杜同書編『全明分省分県刻書考』（線装書局、2001年）。
- (20) 『改訂内閣文庫漢籍分類目録』（内閣文庫刊、1971年）。

〔付記〕

本稿は平成23年度科学研究費補助金（基盤研究C）による研究成果の一部である。